

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史傳心柳狂句

二十一

古典文庫

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史詩心柳狂句

二十一

古典文庫

昭和五十四年五月二十日印刷發行

非売品

編者 中西賢治

發行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

日本史伝川柳狂句
第二十一冊

發行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

凡 例

一、第二十一冊として、三面子原文の第二十一冊の初め、近世之巻、壹、江戸時代前期「宇喜多秀家」（二〇〇一頁）から、貳、江戸時代中期「覺彦比丘」（二〇九四頁）までを収めた。

一、校訂に際しては、三面子原文を見得る限りの原本によつて照合し、欠字（伏字）を充填し、出典を補訂した。

一、終りに、翻刻に当り、三面子原文の欠字充填その他について、貴重な資料を御貸与賜り、また、多くの御援助を忝うしました大坂芳一・大澤美夫・倉島長生・進士慶幹・鈴木一・千葉治・中西孝雄・延廣眞治・芳賀定・花崎清太郎・濱田義一郎・廣田政之進・南得二の諸氏、其他お名前は記しませんが多くの皆様方、また、閲覧を御許可下さいました国会・東京都中央・東洋文庫・日本大学総合・無窮会の各図書館並びに日本大辞典刊行会に感謝致します。

昭和五十四年一月十五日

中 西 賢 治

岡田三面子先生遺稿

日本史伝川柳狂句 第二十一冊

近世之卷

一、江戸時代前期（続）

○宇喜多秀家（一六六二）

○秀吉に仕へ、征韓の役に功あり、奸臣長船紀伊守を寵して禍根を残し、関ヶ原敗戦後、薩摩に逃れ、後八丈島に流され、後西寛文二年、寿を以て終る、

長船のかちで浮田をくつかへし

一四二・二四オ

○熊谷稻荷（一六六二）

○所在、浅草本堂後西方高原町本法寺境内、後西寛文二年、越前太守の臣熊谷安左衛門の勸請、盜難除の守札を出す（比較「川柳江戸砂子下」）

盜人の番ハきひしき本法寺

七一・七ウ

此土手の先キてくまかへ寺を持チ

明五子・礼二ウ

——安左衛門

熊谷の土手と稻荷ハ大ちがひ

四八・一六オ

——追剥が出る、看 蓮生

熊谷におそれしら浪よりつかず

一〇九・一二ウ

○お夏清十郎（一六六二）

○後西寛文二（一六六二）年のこと、姫路の旅店但馬屋の手代清十郎、主人の娘夏に通じて暇を出さる、兩人大坂を志して駆落する途中捕へられ、清十郎は拐犯かどわかし及金子紛失の廉に因り、同年五月二十九日死刑に処せらる、お夏は悲歎の余り長く狂乱の体であつたが、後片上といふ地に茶見世を出だし、七十余歳まで生延びたりといふ（一説に、清十郎死に臨み烟草を所望し、お夏の差出したる烟管にて咽喉を貫きて果て、お夏も自殺せりと）、兩人の浮名は「むかひ通るは清十郎でないか、笠がよく似たすげ笠が……」の流行唄に唄はれ、西鶴の「五人女」の主材となり、歌舞伎や浄瑠璃に仕組まれたるものも多し、

清十良あつい女とちゝつくり

安四未・信五オ

○慶

菴（一六六五）

○靈元寛文五年の頃、江戸木挽町に大和慶菴（或作慶安）といふ町医師あり、二人の浪人と共に、婚姻の媒酌、奉公人の世話などをなす、後口入業者を慶菴（或作桂庵）と称するに至れり（神代余波中巻）

けいあんハ文字が方かと聞て行

二・三四ウ

——藝は常磐津

けいあんハお上ミを二人リ程ころし。

七・二六ウ

——少く云ふ

○起 倒 流（二六六六）

○初め京極高国、後松江侯松平直政（寛文六年二月卒）に仕へし寺田勘右衛門正重の開きし柔術の一流、

きとう流でもまいらぬハ新造の手

三五・一三才

○三世 相（二六六七）

○仏教に卜筮の法を加へ、各人過現未の因果吉凶を説ける俗書、我国にては霊元寛文七年刊「天生撰命鑑三世相天門鈔」などあり、

かんざしてつつ突キ廻す三世相

三・一五ウ

子の数をさきへあんじる三世相

四・二七オ

はくろがあたり三世相をこわがり

宮二・一四甲オ

三世相下女殊の外くろうがり

〔六・三〇ウ
拾三・二七オ〕

三世相下女はなはだらくるいし

拾三・二七ウ

○深草の元政げんせい（一六六八）

○高僧、姓は菅原、俗称石井吉兵衛、京都の人、二五才、主、彦根侯伊井直孝に従ひ江戸に在る時、三浦屋の二代高尾と偕老の契を結び、高尾故ありて自殺するや、遽に発心したといふのは俗説、博覧強記、数多の名著あり、また詩文集に『草山集』あり、

一、深草に隠退

○致仕後居を深草に占め瑞光寺と称す、法華を信じ持律甚だ厳なり、

元政の朝寐鶉。か来て起し

梅柳二〇・二オ

——深草の名物

鶉啼声に元政朝つとめ

新五百・上六〇ウ

元政が庵へ預ける鶉籠

一一四・一七ウ

徒然に元政のぞく土轆轤。

弘二・佃三〇ウ

——土器も亦深草の名物

元政が庵夜咄しに土器師

新四・四ウ

深草の元政。こまを廻しそう

一一〇・二〇オ

——源水の音に似る

二、母の後を追ふ

○元政親に仕へて至孝、父の歿後、母の望に任かせ扶持して身延に行

く、時に母の年七十九、靈元寛文八年母八十七歳にして死し、元政亦暴に病みて寂す、年四十六、

雅にぬきんでた元政も髭を帰依

新五百・上三四オ

——法華

身を延る山へ元政母をつれ

新五百・下四〇ウ

あの世此世へ元政が二世の孝

新三六・月八オ

○雛屋立圃りうほ（一六六九）

○野々口氏、名は親重、松斎と号す、丹州保津の人、和歌を烏丸光広に、書を尊朝法親王に学び、又俳諧に巧みにして貞徳門の二客と称せらる、靈元寛文九年九月歿、年七五、

一、紅屋

○立圃、俗称を紅屋庄右衛門と曰ふ、

誰手にかふれん扇に紅屋の句

安政元・リ一二オ

紅屋て絞る肖柏か古今の秘

安政元・リ二オ

——肖柏は宗祇より古今の伝を受く・立圃が更にそれを練る

二、雛屋

○京師に出でゝ雛人形を鬻ぐ、因て人呼んで雛屋立圃と曰ふ、

雛屋立甫ハ内裏迄聞えた雅

安政三・海七ウ

胡粉とく隙も立甫ハ練る句案

嘉七・神一一オ

雛屋の風骨何となく和らかし

慶二・田二三ウ

立甫の雅ひなの間イにも古今集

嘉六・佃一三オ

古今の秘雛屋立圃にさへ解す

万元・フニ〇オ

三、京 童

○著す所の書、「若楓」、「小町躍」、「すり火打」、「空つぶて」、「江戸紫」、「こきりこ千句」其他頗る多き中に、「京童」と名くる名所記あり、好事家の箱に雛屋の京童

嘉？桜八〇オ

四、次郎左衛門雛

○一名芋雛、顔の形普通より長く、里芋の皮を剥きたるに似たるより斯く名く、総て内裏雛にして、寛永頃（二六四三）を最古とし、享保より寛政頃迄盛んなり、立圃の俗称は、前記庄右衛門の外、次郎左衛門と云へり、次郎左衛門雛は若しや立圃が製作又は販売したる雛の称にて

はなきか（看川柳鮫鉾
第三卷第三号）